

報告 I

倫理の裏づけとしての慈悲

叡山学院教授
坂本廣博

坂本でございます。実は現代仏教ということではありますが、専門に考えているわけではありませぬので、この場所で議論させていただくことが、私が出てこなければいけない理由はたぶん何もないと思ひます。桂先生にこれは何が何でも出てくれなければと言われて出てきたわけで、これから話す話も、いわゆる現代仏教を上手くしゃべれるかと、そんなことはありませぬので、その辺をお許し願ひたいと思ひます。

実は、今日は社会と政治と実は問題があるかもしれないというサンガラトナさんのお話でございます。それ以前に、サンガラトナさんは実はうちの学院で勉強してくれましたので、24歳でしたか、彼がインドへ帰るときには本当に大丈夫かなど。これは現在、叡山学院の院長をやっております堀沢祖門が彼の比叡山におります時の師匠でございますが、彼も延々と悩んでいました。

それ以上に、確かあの時はわざわざ院長室に呼ばれて「おい、こんなことを言っているぞ、どうしよう」と言われて、「これは僕には返事できませんよ、彼が決めることです」と言ったのですが、実は彼は結婚をして、いわゆる先ほどの話でいうと聖職者としてインドに渡るのでなくて、みんなで大乘仏教を広めるためにインドに渡るといふ話を聞きまして、大丈夫だろうかと言われたのですけれども、大丈夫かと言われて「うん」と言うわけにもいきませぬし、「分かりませぬ、彼の努力次第でしょうね」と言ったのです。いまほどの話を聞いていまして、やはりすごい苦勞をしたのだろうと思ひながら、彼のいうところを聞き入ったのでした。今後の活躍を期待したいと思っておりますし、いよいよ元気で頑張っていたきたいと思っております。

天台仏教は、最澄さん以降はずっとそうなのかもしれませんが、国家といひますか社会といふものとの付き合いを本当にやるということ、ずっと考えてきたのだと思ひます。ただし、現状の天台宗はあまりにも小さくなりすぎて、その力は一切ございませぬ。言い過ぎかもしれませんが、本当に残念ながらその力はありませぬ。

ただ、いろいろ思うことがありまして、まず最初にこういう馬鹿な本があります。何年か前に、寺脇研をご存じだと思ひます。例のゆとり教育の問題の時に初等教育の課長か何かでもって、延々と土曜日を休校にするだとか、ゆとり教育で週何時間しかやらなくてい

いとか、その結果として日本の教育レベルは、これはペーパーテスト上かもしれませんが、すごく下がった。たまたまそのころの時代に書かれています。これは本気で読むつもりで買ったのではなくて「へえ、そんなこともやるのだ」と思っただけで買ったわけですが、教育をないがしろにするという意味では、誠にけしからんというふうに思っています。

それで実はここで、教育とか仏教が何か本当はしゃべらなければいけないという話の時に、もう一つありますのは、これも最近気に入らない話。リーマンショック以前からずっとあったのだと思うのですけれども、実体のない経済と言って、これも経済学を知らないでしゃべっていますから、経済学者の方から言われたら、馬鹿を言っているなと言われてもしょうがないと思いますけれども、何か勝手に上のほうだけでふわふわして、金をもうけることだけに執着している。

ものを作るのだったらものを作ったことによって金をもうける。サービス業だってそれは社会に明らかに貢献していますから、それは正当な行為だと思うのですけれども、金をやり取りするだけで何が何でももうけようとしている人。それを許すようなことを言ったり許してはいけないということを新聞等、ジャーナリストが言えないことが間違っているのではないかというように、怒りに近いことを延々と思っています。

それで実は今日、こういったシステム、倫理をどうやって現在の社会の中で納得してもらえるように我々がしゃべる努力をしなければいけないのではないかなという話を、ほんの一端でもできればいいかなと思って出てきたわけでした、二宮金次郎なんてのも実は必要なのでしょう。いま言いましたように、まさに乱暴な話から入ります。

まさしく、倫理を表に出す。そうすると確かに社会は安定する。江戸時代がずっと安定してきたのは仏教ではないかもしれませんが。儒教が表だったのかもしれませんが、でも実は例えば私は田舎の檀家か60軒ぐらいしかない本当にど田舎の寺ですが、その寺の蔵の中に『大学』があるのです。12冊ある。ということは、寺子屋といいますが、少なくとも勉強したい人たちにお坊さんがそれを教えるだけの努力をしてきたのだらうと思います。全部表紙は張り替えてありますから、延々と使い込んで、最終的には渋皮を塗った紙で表紙を作り直してありますから、延々と使い込んだのだらうと思います。

ですから、そういう意味で寺が教育に携わってきたと思ってみると、倫理そのものになる。『大学』というのは、例の修身があちこち説かれており、それを明治以降使いすぎまして、逆に批判されるようですけれども、修身・齐家・治国・平天下の前にもう一つ心を誠にする。誠心という話を書いてあるわけでした、否定形で読むではいけないのだと思います。そういうことをずっとやってきた。それをどうもないがしろにしつつあるのが仏教かなという気が延々としているわけです。

ただし、そうは言いながら、物事というのは二面性がございまして、イスラム原理主義がどうのこうのという話が現在テレビであちらこちら出てまいります、あの問題になりますと徹底的に乱暴になります。あそこまで乱暴になるとそれはまた問題かな。そうする

と、どのレベルでどう考えるのだという点に関しては、残念ながら答えを持っておりません。

それでもうちちょっと話をいい加減に申し上げます。たまたまここにシトー会というキリスト教の修道院があるのです。なんでこんな話を出すかといいますと、たまたまうちの卒業生で川崎のほうで幼稚園をやっているものがいました。それが教員の研修旅行でヨーロッパへ行きました。「先生ついて行ってくれない？」「おれは何も知らないよ、その国」と言ったら「知らなくていいのだ。その代わり例えば何か一つテーマがあるよね」と彼が言い出したのです。

僕は何も分かっていないけど修道院を見せて。修道院を例えばこのぐらゐの旅行のうちに三つでも四つでも入れてくれるのだったらその旅行に喜んで付き合うよということで2回ほど付き合いました。そうすると、例えば南フランスのほうでカタリ派という、結構これは強烈的な戒律主義をとった集団なのだそうですが、その荒れ果てた修道院跡。場合によると山のとっぺんまで教会そのものを上げますから、他の集団（十字軍）から攻撃を受けるのを避けるために、わざわざそんなところまで引っ込んだというような説明を現地を受けました。

現在、シトー会の修道院に行きましても、そんなにたくさん数はいません。昔は何百人いたというのですけれども、今やひょっとすると10人とか、大きいところでせいぜい20人しかいません。ですから、そういう意味では修道院の組織そのものが中途半端になっているというか、どうにもならなくなっているのだらうと思います。たまたまそのシトー会といいますのも聖書を重んじて、時々裕福になりすぎるのに反発して、時々もう1回元に戻ろうよということを延々と繰り返してきています。現在ですとトラピスト会という格好で日本にも、確か北海道に、修道院として続いているようですが、戒律を厳しくするとどうも小さくなる。そんな感じもあるのかなと思ひながら。

そこから先なのですが、どうやって戒律を復興することによって生き残ったかというようなことと裏表の関係になるのであろうと思います。たまたま天台で申しますと最澄さんが大乘仏教、だから大乘戒だという話をされます。先ほどの小乗だ大乘だという話からいくと、最澄さんの場合はどうも大乘だと言ひすぎているから、問題があるのかなと思ひないこともないのですけれども、少なくとも十重四十八輕戒という問題だけはちゃんと持って二百五十戒なんて掬われるな、なんてことを言うわけです。

ところでその後それをどうやら定着させますが、今年報恩忌にあたっています、最澄さんの弟子の慈覚大師円仁であります。円仁に『顕揚大戒論』という書物があるわけですが、たまたま『顕揚大戒論』の序文を菅原道真が書いたということになっていまして、お父さんの是善に依頼したようだけれども、息子の出世のために書かせようということで、菅原道真が書いたということになります。

例えばご覧いただくためには岩波の古典文学大系の中に『菅家文草』と称するものがご

ざいますが、あそこの中にその序文は載っております。その序文の後ろに解説がほんの短く書いてあるのですが、菅原道真のこれが出世作である。一番若いころの序文です。しかもこの序文が現われたことによって、大乘戒は定着したのだとその人は書いているのです。それは何かといいますと、安慧といいます慈覚大師のお弟子さんがお礼状にそれを書いている。こんな素晴らしい序文を書いていただいたからよかったと書くのです。

要するに、この場合にもきつと教団内で論争しているだけだったら単なる水掛け論で終わるものが、たまたまなのだと思いますけれども、菅原道真が序文を書いた。そうすると貴族たちの目に触れることになる。貴族たちが読んでその中でみんなが納得すればいい。それで確実にそれが定着する。たぶんそういうことだと思うのです。

ところで、そのあと本当に守ってきたかという、どうも日本人は戒律に関してはいい加減な面があるのですが、それでもどうなのでしょう。例えば鎌倉のお祖師さんたち。例えば栄西さんには『出家大綱』でしたか、要するに戒を守れ。戒というものの場合、そんなきつい戒ではなくて六斎戒だ、八斎戒です。あれを守れ。そして坊さんらしい服装をちゃんと着けている。昼から飯を食うなというようなところが重点は重点なのですが、その中で、禅ということを書くわけです。道元さんにしても戒律の問題を論じますし、明恵さんもやはり戒律の問題を論じております。

そうすると800年ぐらいのところであって、1200年ぐらいのところである。だから300年ないし400年ぐらいのところ、戒律を守れというものが出ると、ぎりぎり「そんなものかな」と思いながら仏教が続いていくための原動力の一つになるのかなと思ったりもするわけです。

天台の話だけにこだわることになりそうですけれども、例えば室町時代ですと、現在、天台の真盛宗というふうに分かれておりますけれども、「しんせい」というのと「しんぜい」と読む人もいますのですけれども、真盛が念仏と戒経を一致させるのだということで、大乘戒ですけれども、例えば四国だとかいろいろなところに戒壇まで作って、その中で信者さんたちを集めて、そして現代では一派を立てるだけの力として続くということになります。

江戸時代になりまして、今度は先ほど「大乘戒だ、大乘戒だ」と言っていたはずのところへ安楽律という問題が起こります。これはそれ以前の覚法の思想だけでは本物の仏教ではないと考えた人たちがいるのか、あまりにも覚法が、これも実は問題がいっぱいあると思うのです。気楽に墮落したなんて考えてはいけないことは承知で言うのですが、例えばそういうことを考えた人たちが戒律をちゃんと復興しろ。その時に戒律復興するために何を持ってきたかという、中国流の四分律を持ってきてしまうわけです。

要するに宋代の趙宋と言っています。1000年ぐらいのところ、北宋と南宋がある宋ですけれども、あの宋代の天台学を日本に持ち込むわけです。その時にいわゆる四分律を持ち込みまして安楽律と称します。ところが、片方でそれが支配しだすと、もう片方では、

実は三井寺の人たちが中心にはなるようですけれども、敬光とか真流という人たちが、「いや、違うのだ。まさに大乘戒を守らなければいけないのだ」という話で延々とやります。

ですから、そういう人たちがいることによって、たぶん現在の天台宗が存在する。たぶん、そんなふうを考えるのだらうと思います。本当のところは分かっていません。歴史学として今、話をしているのではなくて、まさに直観みたいな話しかしゃべっていませんから、いい加減な話だと思ってお聞きいただくのがいいかもしれません。

その中で、例えばたまたまそこにお出ししました資料で何が言いたかったとといいますと、実は戒律と言いながら、戒律は全部守れないものをちゃんと守れというふうを考えるのか、そうではなくて守ろうとする気があること。これは漢文のまま、誠にいい加減な出し方で申し訳ないと思っておりますが、これは『梵網經』の十重四十八輕戒の中の十重を一番上に出しましたのですが、最初の部分は省略してあります。殺・盜・淫・妄語の部分というのは説明しなくていいだらうということで省略いたしました。

実はここの中でむしろ問題は後ろの四つ。これはある先生方によると、瑜伽師地論の系列の戒律と完全にかぶっている。だからそれから持ってきて十重戒にくっつけたのだという人もいるくらいですが、要するにどうやって人に教えるのか。偉そうなことをしないで全部人に教えることができるのかというようところが、中心的に書いてあるというふうに読めばいいのだらうと思います。

それから言いますと、いまの資料で一番最初に出てきますが、酤酒戒（こしゅかい）というのがどうもこのルーツがわかりづらい。酒を売ってはいけないという定義なんですけど。ただし、『梵網經』というのは変なお経でして、中国撰述だという人がいるのですが、私は中国撰述だというのは反対で、もうちょっと西のほうでできているというふうに思っています。それはともかく、もっと単純に言いますと中国人だったら酒を売ってはいけないなんて戒律は絶対に書かない。だって酒はまさに天を祭るものであり、これを否定したら物事は動かないはず。だから逆に言うと、飲酒戒を四十八輕戒の2番目に持っていただけでもましかもしれません。でもここでも問題が多い酤酒戒を、書かないだらうぐらいに思っているのです。

ですから、もうちょっとよその世界を考えなければいけないというふうに思っています。それはともかく、どこまで行きましたも、どうやって人に教えるか。その時に物惜しみしないかという話が延々と書かれたのが後ろのほうの戒だと思います。

たまたまそんなことで戒という話でいきますと、三聚淨戒という問題も考えなければいけない話になるわけ。要するに戒律をちゃんと守るという話と、実は戒律を守るだけではなくて、良いことをするというのも戒律の仲間だということに考える。それ以上に衆生済度することそのものが戒律だというふうに広げていくわけ。そこには問題を延々と考えることによって、宗教者だという顔ができる。顔ができるという言い方はずるいのですけれども、それによって説得的かつ有効になるのです。そんなことまでひ

つくるめて考えているのかなという気がいたします。

あまり難しいことを考えていなかったものですが、実は資料に先ほど言いました『顕揚大戒論』の一部分を出しておきました。ここでは、実はこれだけ見せておいてどこを見ろというのかと、もうちょっとちゃんとしろと言われる点はお詫び致しますけれども、お坊さんがお坊さんであるためには何かというときに、確かにいろいろなお坊さんがいる。悟った偉い人は問題ない。でも、現実はというと、仏教の本音が分かっているお坊さんというのが後ろの方にあるはずで、正見僧、物事をちゃんと正しく見ることができるお坊さんという訳です。

この話の順番でいきますと、これは『心地観経』を引くわけですから、出家者の戒律をどのように考えるかという問題なのですけれども、菩薩僧があつて声聞僧があつて凡夫僧（三資・四善根住）があつて、その下に正見僧がある。正見僧はたぶん戒律は守れないのです。でも、正因縁の法は知っていて、延々と懺悔する。そんな話までひくるめて、戒律をどこかで考えている。

どこかで戒というか、生きざまを考えるとということをやっているから仏教は切れずに続いてきた。そんな世界を考えていいのかなと思っています。ですから、戒か何かを表に出すと、表に出しすぎると先ほど言いましたように、とんでもない強烈な宗教になるわけです。中途半端に思っているからいいという言い方は完全におかしいですけれども、強烈ではない戒がある。おきてではないです。戒めというのは自分の思いであるだけで、おきてですとたぶん集団からなり、民族からなり否定されるのですけれども、戒はたぶんそういうものではないのだと思います。人のことを思いやる慈悲といってもよいと思います。

その辺を延々となんとか守ろうとしてきたのが仏教者だという言い方をすればいいのか。その戒律さえ守ろうという気が今はひよっとするとなくなっているかもしれないのが一番怖いわけでして、どこかでギリギリでもいいから守ろうという気があれば仏教は続くし、そんなものはいいやと言い出すとたぶんどうなるかな、無くなるということを考える必要があると思っています。

実はこの話は呼ばれましたときに弱ったなと言いながら、たまたま叡山学院という大きなくくりの中でお声がかかったようで、誰も出ていかないというのはあまりに無責任な話になりまして、やむを得ず出てきたわけですが、本当の意味で、私自身、実は中国仏教の結構古いところしかやっていません。天台学はそれなりに原典そのものとして読んでいますけれども、仏教学全体としての天台とか、伝統教学としての天台をちゃんと読んでいるかということそんなわけでもありません。せいぜい唐代までぐらいのものはなんとか読まなければと思って読んできたという、そういう種類の種類でありますので、現在を語れと言われたときに、本来、逃げ出さなければいけないはずの男が出てきまして、訳が分からない話を申し上げたわけです。

ただ、くだいようですが、どこかで戒め、戒というのは自分自身の生き様と置き換えて

もいいかもしれませんが、それを持ち続けないと、お坊さんではなく、煩惱に悩む人間でさえなくなるわけですから、それくらいはせめて持ちましょうよということを申し上げて、つたない話ですけれども、終わらせていただきたいと思います。

十重戒の後戒

若佛子。自酤酒。教人酤酒。酤酒因酤酒。緣酤酒。酤酒業。一切酒不得酤。是酒起罪。因緣。而善薩應生一切衆生明達之慧。而反更生一切衆生顛倒之心。者。是善薩波羅夷罪。

若佛子。自說出家在家善薩比丘比丘尼罪過。教人說罪過。罪過因罪過。緣罪過。罪過業。而善薩聞外道惡人及二乘惡人說佛法中非法非律。常生惡心。教化是惡人。令生大乘善信。而善薩反更自說佛法中非過。者。是善薩波羅夷罪。

若佛子。自讚毀他。亦教人自讚毀他。毀他因毀他。緣毀他。法毀他業。而善薩應代一切衆生受加毀辱。惡事自向己好事與他人。若自揚己德。隱他人好事。令他人受毀者。是善薩波羅夷罪。

若佛子。自懷教人懷。慳因慳。緣慳。法慳業。而善薩見一切貧窮人來乞者。隨前人所須。一切給與。而善薩以惡心。心。乃至不施一錢一針一草。有求法者。不為說一句一偈。一微塵許法。而反更罵辱者。是善薩波羅夷罪。

若佛子。自瞋教人瞋。瞋因瞋。緣瞋。法瞋業。而善薩應生一切衆生中善根無斷之事。當生。悲心。而反更於一切衆生中。乃至於非衆生中。以惡口罵辱。加以手打。及以刀杖。意猶不息。前人求悔善言。憐謝。猶瞋不解者。是善薩波羅夷罪。

若佛子。自誘三寶。教人誘三寶。誘因誘。緣誘。法誘業。而善薩見外道及以惡人一言。誘佛言業。如三百銖刺心。況口自誘不生信心。孝順心。而反更助惡人邪見人誘者。是善薩波羅夷罪。

梵網經 下 24 1009 c

三聚淨戒

云何善薩一切戒。謂善薩戒略有二種。一。在家分戒。二。出家分戒。是名一切戒。又即依此在家出家二分淨戒。略說三種。一。律儀戒。二。攝善法戒。三。饒益有情戒。

律儀戒者。謂諸善薩所受。七衆別解脫律儀。即是苾芻波。苾芻尼戒。正學戒。勤策。男戒。勤策女戒。近事男戒。近事女戒。如是七種。依止在家出家二分。如應當知。是名善薩律儀戒。

攝善法戒者。謂諸善薩受律儀戒後。所有一切爲大善提。由身語意。積集諸善。總說名爲攝善法戒。此復云何。謂諸善薩。依戒住戒。於聞於思。於修。止觀。於樂。獨處。精勤修學。如是時時於諸善長。精勤修習。合掌起迎。問訊。禮拜。恭敬之業。即於尊長。勤修敬事。於疾病者。悲愍殷重。隨侍供給。於諸妙說。施以香。於有功德。補特伽羅。真誠讚美。於十方界。一切有情。一切福業。以勝意樂。起淨信心。發言隨喜。於他所作一切。逢犯。思擇安忍。以身語意。已作未作。一切善根。迴向無上正等菩提。時時發起種種正願。以一切種上妙供具。供佛法僧。於諸善品。恒常勇猛。精進修習。於身語意。在不放逸。於諸學處。正念正知。正行。防守。密護。極門。於食知量。初夜後夜常修。覺悟。親近善士。依止善友。於自愆犯。審諦了知。深見過失。既審了知。深見過。其未犯者。寧護持。其已犯者。於佛菩薩。同法者。所至心發露。如法悔除。如是等類。所有引攝。護持。增長。諸善法戒。是名善薩攝善法戒。

云何善薩饒益有情戒。當知此戒。略有十一相。何等十一。謂諸善薩。於諸有情。能引義利。彼彼事業。與作助伴。於諸有情。隨所生起。疾病等苦。瞻待病等。亦作助伴。又諸善

薩。依世出世種種義利。能爲有情。說諸法要。先方便說。先如理說。後令獲得。彼彼義利。又諸善薩。於先有恩。諸有情。所善守知恩。隨其所應。現前酬報。又諸善薩。於墮種種師子。虎狼。鬼魅。王賊。水火。等災。諸有情類。皆能救護。令離如是。諸怖畏處。又諸善薩。於諸喪失。財寶。親屬。諸有情類。善爲開解。令離愁憂。又諸善薩。於有困乏。資生。眾具。諸有情類。施與一切。資生。眾具。又諸善薩。隨順道理。正與。依止。如法。御衆。又諸善薩。隨順世間。事務。言說。呼召。去來。談論。慶慰。隨時往赴。從他。受取。飲食。等事。以要言之。遠離一切。能引無義。違意。現行。於所餘事。心皆隨轉。又諸善薩。若隱若露。顯示。所有。真實。功德。令諸有情。歡喜。進學。又諸善薩。於有過者。內懷。親昵。利益。安樂。增上。慈樂。調伏。調責。治罰。驅擯。爲欲。令其。出不善處。安。置善處。又諸善薩。以神通力。方便。示現。那落迦。等。諸趣。等相。令諸有情。厭離。不善。方便。引令。入佛。聖教。歡喜。信樂。生。希。有心。勤修。正行。

瑜伽師地論卷40 下 30 571 a

顯示菩薩為僧篇四

諸執小輩。但知聲聞為僧。未信菩薩為僧。爾乃愚昧之流。誤著聲聞名。而濫聲聞之次。庸未之比。貶大乘戒品。而為沙彌之戒。謗大乘罪因。斯而與。背佛制業。從此而重。永淪惡趣。解脫無期。今引大乘本生心地觀經及大涅槃經等。顯示此義。

初引心地觀經者。大乘本生心地觀經第二報恩品云。善男子。世出世間有三種僧。一菩薩僧。二聲聞僧。三凡夫僧。文殊師利及彌勒等是菩薩僧。如舍利弗目犍連等是聲聞僧。若有成就別解脫戒。真善凡夫。乃至具足一切正見。能廣為他演說。開示眾聖道法。利樂眾生。名凡夫僧。雖未能得無漏戒定。及慧解脫。而供養者。獲無量福。如是三種名真福田。復有一類。名福田僧。於佛舍利及佛形像。并諸法僧。所制戒。深生敬信。自無邪見。令他亦然。能宣正法。讚歎一乘深信。因果。當發善願。隨其過犯。悔除業障。當知是人。信三寶力。勝諸外道。百千萬倍。亦勝四種轉輪聖王。何況餘類一切眾生。如壽金花。雖狀萎弊。猶勝一切諸雜類花。正見比丘。亦復如是。勝餘眾生百千萬倍。雖毀禁戒。不壞正見。以是因緣。名福田僧。若善男子善女人等。供養如是福田僧者。所得福德。無有窮盡。供養前三真寶。所獲功德。正等無異。如是四類聖凡僧寶。利樂有情。恒無暫捨。是名僧寶。不思

議恩已上

論曰。此文顯示何義。陳說世出世間中僧寶有四類。田僧。如經一菩薩僧。二聲聞僧。三凡夫僧。四正見僧。文殊師利及彌勒等是菩薩僧。舍利弗目犍連等是聲聞僧。若有成就

別解脫戒。真善凡夫。乃至具足一切正見。能廣為他演說。開示眾聖道法。利樂眾生。名凡夫僧。復有一類。名福田僧。於聖所制戒。深生敬信。自無邪見。令他亦然。能宣正法。讚歎一乘深信。因果。當發善願。隨其過犯。悔除業障。雖毀禁戒。不壞正見。以是因緣。名福田僧也。言別解脫戒者。不犯一一別條。名別解脫。又一別條。只是

同一清淨心故。云別解脫戒。然於此中。受別解脫戒。真善凡夫僧。而有二種。一者菩薩真善凡夫僧。二者聲聞真善凡夫僧。並是內外凡位之人。故經結云。雖未得無漏戒定。及慧解脫。而供養者。獲無量福。名真福田。次正見僧。是未入位。故經結云。雖毀禁戒。不壞正見。以是因緣。名福田僧也。若依此經者。當知聲聞僧外。別有菩薩僧也。

曰仁

顯揚大戒論 下 74 678 女